天台智顗の観音信仰について

講師　瀧　英寛

観音菩薩は、歴史上、最も信仰された仏教の尊格のひとつである。多くの大乗経典・密教経典にさまざまな特性を備えた姿形で登場しているため、観音の性格を一様に定義・把握することは困難であり、その信仰形態も多岐にわたる。それら多様な様相を呈する観音に対する諸信仰のなかから、今回は中国の六朝期から隋代にかけて活動した天台智顗を取り上げ、彼に関わる文献資料を中心に、そこで観音がどのように信仰されていたのかを概観した。

天台智顗の観音信仰を知るための文献資料は、灌頂撰『隋天台智者大師別傳』や道宣撰『續高僧傳』（習禪篇）所収の釋智顗傳を中心とする伝記資料と、註釈文献資料とに大別できる。註釈文献資料としては、当時の観音信仰の基礎となった『法華経』普門品に対する註釈を含む『法華文句』、その別行である『観音玄義』『観音義疏』、『請観世音消伏毒害陀羅尼呪経』の註釈である『請観音経疏』、請観音懺法の説明を含む『次第禪門』『摩訶止観』を挙げることができるが、それらが本当に天台智顗によるものなのかという著作問題も含めて検討しなければならず、容易に結論を引き出すことはできない。そこで、対象資料を特に慧皎撰『高僧傳』と道宣撰『續高僧傳』に絞り、天台智顗の伝記に記録されている観音信仰が、他の僧伝資料に見られる観音信仰とどう違うのか、またどのような信仰世界のなかに位置づけられるのか、を観察することにした。

はじめに、天台智顗の伝記資料に見られる観音に関わる三箇所の記述、すなわち幼年期において僧侶から普門品を口頭で伝授され一度で暗記してしまった、という逸話と、青年期に落馬した皇太子のために観音懺法を修法することで治癒した、というエピソードと、臨終時に観音が来迎した、という記事に基づいて、それらをそれぞれ、普門品に関わる観音信仰、懺悔法の一部としての観音信仰、臨終時の来迎者としての観音信仰と区別し、同種の観音信仰が認められる僧伝を『高僧傳』・『續高僧傳』からリストアップしてみた。その結果、特に懺悔・悔過・禮佛・齋・見佛・見菩薩儀礼などの懺悔法の一部としての観音信仰のなかに、天台智顗の観音信仰の基本的性格がもっとも集約的に認められるのではないか、という判断に至った。

『高僧傳』・『續高僧傳』にはいくつかの懺法・禮懺の実践例が記録されているが、観音懺法に関する情報は、天台関連の僧伝にしか見られない。天台智顗の弟子の一人である釋普明（大正蔵 50.586a）と、天台智顗とともに南岳慧思の弟子であった釋惠成（大正蔵 50.557b）との二つの僧伝に観音懺法の情報が見られ、天台智顗の行った観音懺法はおそらく南岳慧思から伝えられたものであること、天台智顗もそれを弟子に教示・指導していたであろうことが推察される。

天台周辺の僧侶達は、さまざまな禮懺のひとつとして観音懺法を実践していたと考えられ、その目的は方等懺法や法華三昧の実行と同じく、なんらかの奇瑞の発現、より端的には観音の顕現を獲得することにあった。天台智顗が臨終時に観音の来迎を得たことがその伝記に記録されているのも、その仏道修行の成果の明確なあらわれとして重要視されていたからと考えられる。観音の来迎をはじめ、さまざまな奇瑞や神秘現象を引き起こすことは、当時の仏教世界において極めて重要視されていた。そのことが僧伝資料からは読み取れる。経典の註釈を作成すること自体は、意外なほど評価されていない。その伝記資料からうかがうことのできる天台智顗の観音信仰は当時の僧伝資料に見られる観音信仰の諸形態を、十分に反映したものと言い得る。